再生原料100%使用にこだわり 高強度・高品質のフィルム製品づくり

再生原料１００％を使ったフィルム製品の生産に定評がある、宇陀市榛原篠楽の宇陀化成工業株式会社は、創業の昭和60（１９８５）年11月から35年が経つ。創業者で現在監査役の父・栗林道治さん（70）から、30歳の時に代表取締役社長を引き継いだ栗林浩二さん（39）は、社長業９年目に入る。現在32人いる従業員は全て正社員。人材育成と社員の幸せを第一に挙げる。別注品の産業資材で、リーマンショックを克服、そして今は新型コロナの渦中にある。「厳しい時にこそ攻める」の姿勢を貫き、環境に優しいリサイクル分野で集中し、高強度・高品質の製品づくりにこだわり続ける。

Made in 奈良

大型インフレーション成形機設置の工場内

宇陀市　宇陀化成工業株式会社

宇陀化成工業株式会社　栗林浩二さん　代表取締役社長

同社は農業資材を含めた包装資材の販売を手掛けていた栗林商店が出発点。その後、道治さんに知人から「リサイクル原料を使ってフィルム製造してみないか」と声が掛かった。高温で溶かした再生原料を円筒状に押し出し、その中に空気を吹き込んで膨らませ、ロール状に巻き取る「インフレーション成形」という製法で袋を作り始めた。

父親、おじ、母親と事務員の４人からのスタート。やり続けているうちに、仕入れ先、リサイクル原料を作る業者から「原料を買ってほしい」といったことが徐々に増えてきた。今でも県内では5社ほどある。

ただ、インフレーション成形は基本的に24時間操業。昼間に配達に行って、帰ってきてすぐ寝て、また夜勤に入ってという生活の繰り返し。機械の熱でプラスチックを溶かしてフィルム成形する。焦げたりして生産性にロスが生じる。

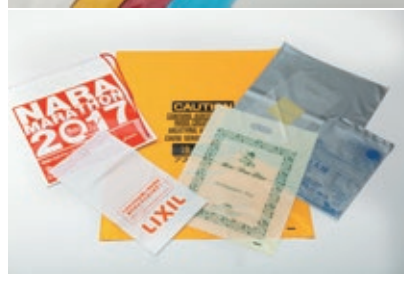
栗林社長は「生産性ロス率を極力なくすため、24時間操業が一般的になっていました。日曜だけが唯一休みでした。私が物心ついた時から家の横で袋を作っていたので『こんなもんかな』と思っていて。日曜になると静かすぎて、逆に怖いぐらいでした」と当時を思い浮かべる。

平成10（1998）年、阿騎野ゴルフクラブ（宇陀市大宇陀栗野）の南側に土地を購入して新工場を建設。それまで、月に150㌧ぐらいの生産量が倍ほどに。それと同時に、リサイクル原料を使って作っていたごみ袋「ポリハイ」が、国内で初めてエコマークを取得した。

「これは快挙でした。基本的にごみ袋って、リサイクルできない。捨てるものですから。エコマークというのは、再利用できるものに付くものです。日本環境協会さんに『リサイクル原料100%でやっていますよ。ごみ袋のような消耗品であっても、こういうことを普及させるべきではないでしょうか』と話をしたところ、許可が下りまして。土木建築用のシートにも」と、父親のこだわりに笑顔をこぼす。

リサイクル原料のため、良い原料ばかりではない。不具合が出たりすることもある。常に父親のそばにいて見てきた浩二さん。「そこで、どうやったら使えるのかなと考えながら製造するんです。いろんな工夫をしながら、原料を使いこなしてきましたので、反響は非常にありました」と話す。

それから会社拡大のため平成20（2008）年9月に現工場に移転したところ、2カ月後にリーマンショック。旧工場の返済も残り、新工場の土地も買い、設備も増やして人も倍増させた矢先のこと。仕事量は激減した。エコマークで全国に売っていた商品が一時的に止まってしまった。当時専務だった栗林社長は、リーマンショックの影響で急に原料に高値がついたり、急に安くなったり、金融が急に下落したりという中で方向転換を試みた。



シート製品（上）と包装資材（下）

「厳しい時にこそ攻める」経営姿勢 人材育成と社員の幸せを第一に

「ちょっと待てよ。ごみ袋ばかり作るのではなく、もっと産業資材（別注品）を企業に使ってもらえるような製品づくりもしたらどうかな」と。リーマンショックが一つの契機となった。

リサイクル原料を使った用途を見直して方針を変えたところ、いろんな客から声が掛かった。リーマンショックの影響は半年ぐらいだったが、半年を超えてからはここ11年間、順調に右肩上がり。現在、月約５００㌧の生産量がある。

「リサイクルという考え方は、永遠のテーマ。今はSDGs達成に向けたということもありますし、当然引き合いも増えてきています」と話す栗林社長だが、いま一番に力を入れるのが社員教育。離職率も激減した。

「製造業ですので、人の教育をすることによって、職人の気質がある人間と、マネジメントのできる人間―の２つのタイプに分かれます。それぞれの持っている能力をフルに発揮してもらう、そういった組織をつくりました。この2年、経営指針に基づいて社員一人一人が目標設定しながら、同じ方向を向いて進んでくれていますので」と、コロナ禍の中にあって考えさせられる年であったことに、ポジティブに意義を見出している。

危機に直面すれば、「チャンス」と受け止める。厳しい時ほど攻める、という姿勢を崩さない。リーマンショックを乗り越えたことが根底にある。「今できることは何かなと思ったとき、例えば飛沫感染防止用のシートがありますよね。材質が違うのですが、うちらのフィルムでできないかなと思って。透明性を出して。それで高透明シートということですぐに企画して、主要なところに配ってきました」と話す。

病院で使う簡易エプロンは、ごみ袋を改良して製造。滋賀県大津市や大阪の病院に引き合いが。コロナの影響を受けながらでも、社会貢献を視野に入れながら、「今できることといったら、激安でも使ってもらうことに意義があるし、こんな時だからこそ、既存のお客さまにも知ってもらわなければ」と思い、会社案内も２５０社に配布した。

ポリエチレンというフィルムが、森林破壊を守り環境に優しいものであることに理解を求める。栗林社長は「海洋プラスチック、海洋ごみの問題が取り上げられていますが、それは海や川に捨てる人のモラルの問題であって、袋が悪いんじゃありません。使う人のモラルが悪いだけです」とチクリ。

その上に立って、「私の理念は、まずは従業員の幸せ。その従業員の幸せというのを求めながら、それが社会貢献につながっていくことが一番の理想でもあるし、その手段がなくてはならない、すたれるはずのないリサイクル商品。環境に優しいモノを作りそのことを追求し続けること。終わることはないと思いますし、そこに尽きます。必要とされる企業を目指しながら」と力を込める。

○創業＝昭和60（１９８５）年
○代表取締役社長＝栗林浩二
○従業員＝32人
○資本金＝２０００万円
○事業内容＝純日本製のシート、作業性と機能性を兼ね備えた幅広の大型袋、廃プラスチックから生まれた高品質「純国産」エコ収集袋、そのほかニーズに合わせたオリジナル品など多様な商品の製造・販売
○本社住所＝宇陀市榛原篠楽１１７-１
○電話番号＝０７４５（85）３００１
○ファクス番号＝０７４５（85）３００２
○Ｅメール＝info@udakasei.co.jp

https://www.udakasei.co.jp/